

年間第 28 主日 (マタイ 22:1-14)

救いを成し遂げてくださった方を証明する生き方が必要



私たちの教会は、定期的に巡礼団が来てミサをささげますが、今月特別な方がおいでになります。大阪高松大司教区の教区長となられた前田万葉枢機卿様が 28 日(土)巡礼団と一緒においでになって、午後 3 時 50 分から福江教会でミサをささげてくださいます。浜脇教会でも、29 日夕方 4 時からミサをささげてくださいます。特に浜脇教会では主任司祭を務められた方です。可能でしたらそれぞれ参加してください。

今週の福音朗読は、天の国を「王子の婚宴」にたとえています。「王子」は、イエス・キリストでしょう。ただ、イエス様のご生涯のどの部分を「婚宴」と言っているのでしょうか。イエス・キリストのとても大事な場面に、招いておいた人々は来ようとしなかったのです。

また、見かけた人はだれでも集められたと言うのですが、どの場面が当てはまるのでしょうか？中田神父は、「婚宴」が王子の生涯の決定的な場面であるなら、それはイエス・キリストの十字架の場面なのではないか、と考えました。

たとえ話の「招いておいた人々」は、おそらくユダヤ人です。先に、ユダヤ人が救われるはずでしたが、彼らは心を開くことなく、イエスを死に追いやったのです。

一方で、町の通りで見かけた人はだれでも婚宴に連れて来られました。当時の習慣では、貧しくて礼服を持たない人がいれば、招いた側が礼服も用意してあげることになっていました。しかし客の中に、礼服まで調べたのにそれを拒んだ人がいたのでしょうか。その人は目の前にあったチャンスをみすみす逃しました。

これは、イエスの十字架上の出来事を振り返るとよく当てはまります。イエスの十字架のそばには、犯罪人も十字架にかけられていました。そして一人は回心して救われ、一人はそれをみすみす逃したのです。

ここで私たちは考える必要があります。「礼服」とは一体何だったのか、ということです。中田神父はこの「礼服」を、「救いを成し遂げてくださったイエスを証明する生き方」と受けとめました。「救い」そのものはイエスが十字架上で成し遂げてくださいました。しかしその救いは、私たちが生き方で証してこそ、一人ひとりに実現するものなのです。「イエス様が救ってくださったのだから、私たちは墮落した生き方をしても構わないのだ」ではない、ということです。

あらたまった場所に紺のスーツとネクタイをして出席すれば、ふだんは汚れが付いても気にしない人も、スーツにブラシをかけたりして常に良い状態を保とうとします。それはその人が、招かれていることを態度で証しているわけです。そのように、自分がイエスによって救われていることを忘れず信仰の良い状態を保とうとする時、私たちの救いは確かなものとなるのではないのでしょうか？

私たちは一人残らず、イエスの十字架によって救いの宴に招かれた

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

のです。私たちにできる生き方で、救いに招かれた者であることを証しましょう。あなたがどこでも十字架の印ができる。その一つ取っても、礼服を身につけているのだとすべての人の前で証明することになります。

年間第 29 主日(マタイ 22:15-21)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。